

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	東邦大学新生児学講座の歴史と周産期センター
別タイトル	History of department of Neonatology and Toho university perinatal center: Department of Neonatology
作成者(著者)	与田, 仁志
公開者	東邦大学医学会
発行日	2019.06.01
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 66(2). p.146 148.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	教室(診療科)紹介
著者版フラグ	publisher
JaLCDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.2019 030
メタデータのURL	https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD56350799

教室(診療科)紹介(113)

東邦大学新生児学講座の歴史と 周産期センター

新生児学講座

教授	: 与田仁志
准教授(病院)	: 川瀬泰浩
助教	: 荒井博子, 水書教雄 齊藤敬子, 日根幸太郎 玉置一智, 緒方公平
助教(任期)	: 豊田理奈
シニアレジデント	: 平林将明
レジデント専攻医	: 森谷菜央, 村井裕香 田中章太, 石嶺里枝

新生児学講座の歴史

東邦大学医学部新生児学講座の前身は昭和56年の東邦大学周産期センターと昭和60年の新生児学教室です。築地産院から帰校された小児科の藤井とし先生(東邦大学卒)が主催されていました。新生児室を小児科病棟ではなく、周産期センターとして分娩室に連結すると言うのは当時では斬新な試みであったと思います。平成3年より全国に先駆けて新生児学講座として小児科学講座とは独立して開設されましたが、これは東邦大学最大の特色とも言えます。講座制としての新生児学教室を有していますので大学院生の入学が可能です。初代新生児学講座教授として多田裕先生(東京大学卒)が築地産院から赴任されました。そして、平成16年からは2代目教授として宇賀直樹先生(東京大学卒)が務められ、平成22年からは私、与田仁志(日本医科大学卒)が3代目教授として日本赤十字社医療センターから着任し、今に至ります。現在では全国的にみても病院内に小児科とは別に新生児科を標榜している病院が増えてきていますが、大学医学部の講座として新生児学講座があるのは全国的に見ても珍しく、貴重なテストケースとして全

国の教育機関や病院の注目を集めています。この東邦大学の伝統は是非引き継いでいただきたいと切に願っています。

周産期センターの紹介

新生児学は従来、学問的には産科学の範疇と小児科学の範疇にまたがる分野ですが、歴史的には50年以上も前ですが、産婦人科の先生方が妊婦と同時に新生児の診療もおこなう時期がありました。現在、新生児学は小児科学の一分野となっていますが、当然のことながら、新生児科医は小児科だけでなく産科学の素養が必要となります。周産期センターとして産婦人科の先生方と密接にコラボレーションし、お互い周産期専門医としてのプロ集団を形成しています。最も関連のある学会は日本小児科学会とその分科会である日本新生児成育医学会、さらに日本周産期・新生児学会の3つです。日本周産期・新生児学会の認定基幹施設として周産期(新生児・母体胎児)専門医を養成するとともに、医療行政面では総合周産期母子医療センターとして最高次医療機関の責務を果たしています。東邦大学は全国で最も早く、平成9年に東京都より「総合周産期母子医療センター」の認定を受けました(表)。いわば東邦大学新生児学教室は周囲から見ると、「伝統がある」とか、「老舗の」という風にみられています。「総合周産期母子医療センター」とは、母体・胎児集中治療管理室(MFICU)を含む産科病棟と新生児集中治療管理室(NICU)を備えた医療機関のことで、母体・新生児搬送の常時受け入れ、母体の救命救急への対応、ハイリスク妊娠に対する医療、高度な新生児医療などを担う部門です。東邦大学医療センター大森病院は母体・胎児集中治療管理室(MFICU)を9床、新生児集中治療管理室(NICU)を15床、新生児回復期治療管理室(GCU)18床、正常新生児室20床以上を完備しています(2019年4月現在)。急性期だけでなく、退院後の乳幼児保健指導を含む小児医療にも取り組んでいます(フォローアップ外来)。また、東邦大学医療センター佐倉病院は千葉県の「地域周産期母子医療センター」に指定されており、同じ周産期センターとして相互に連携をとり、専用回線を用いたテレビ会議システムを利用して、随時症例カンファレンスや教育用講義を共有しています。

診療面で特記すべき点は、胎児超音波検査外来であります。新生児科と産科の共通の診療対象である「胎児」に焦点を当てた診療で、わが教室の得意分野の一つです。病児を胎児期よりご紹介いただくこのシステムは平成22年の小生の赴任に合わせて開始したのですが、現在は軌道に乗り、出産前から妊婦さんやその家族と関わるのが可能となり、これは出生後の新生児集中治療、退院後の発達フォローアップへと続く小児科診療のスタートであり、小児科

表 東京都周産期母子医療センターの現況

平成30年10月1日

■ 周産期母子医療センター

区分	施設名	所在地	NICU (床)	M-FICU (床)	指定・認定年	
区部	豊育病院	港区	12	9	11年4月	
	東京大学医学部附属病院	文京区	9	6	23年4月	
	昭和大学病院	品川区	15	9	15年4月	
	東邦大学医療センター大森病院	大田区	15	9	9年10月	
	日本赤十字社医療センター	渋谷区	15	6	13年11月	
	国立成育医療研究センター	世田谷区	21	6	24年8月	
	東京女子医科大学病院	新宿区	18	9	9年10月	
	都立大塚病院	豊島区	15	6	21年10月	
	帝京大学医学部附属病院	板橋区	12	10	10年4月	
	日本大学医学部附属板橋病院	板橋区	12	9	14年4月	
	都立墨東病院	墨田区	15	9	11年6月	
	総合周産期母子医療センター区部計(11施設)			159	88	
	地域	聖路加国際病院	中央区	6	-	12年4月
		東京慈恵会医科大学附属病院	港区	9	-	11年1月
順天堂大学医学部附属順天堂医院		文京区	6	4	9年10月	
東京医科大学医学部附属病院		文京区	6	-	27年4月	
東京医科大学病院		新宿区	12	-	9年10月	
慶應義塾大学病院		新宿区	9	6	16年6月	
国立国際医療研究センター病院		新宿区	6	-	22年10月	
東京女子医科大学東医療センター		荒川区	9	-	16年9月	
葛飾赤十字産院		葛飾区	12	-	9年10月	
賛育会病院		墨田区	6	-	9年10月	
地域周産期母子医療センター区部計(10施設)			81	10		
区部計(21施設)			240	98		
多摩	杏林大学医学部附属病院	三鷹市	15	12	9年10月	
	都立多摩総合医療センター・小児総合医療センター	府中市	24	9	22年4月	
	総合周産期母子医療センター多摩計(2施設)			39	21	
	町田市市民病院	町田市	6	-	21年2月	
	国家公務員共済組合連合会 立川病院	立川市	6	-	27年4月	
	武蔵野赤十字病院	武蔵野市	6	-	18年4月	
	公立昭和病院	小平市	6	3	25年4月	
地域周産期母子医療センター多摩計(4施設)			24	3		
多摩計(6施設)			63	24		
合計(27施設)			303	122		

(注) 病床数 (NICU及M-FICU) は認定病床数である。



図1 第63回日本新生児成育医学会ポスター

医として貴重な経験を積むことができます。胎児期から始まるこの診療は、出生前より介入できる新しいタイプの新生児科医の養成が目標です。このような特徴を前面に押し出して獲得できた文部科学省の大学改革推進等競争的補助事業について述べます。

「平成22年度文部科学省補助金 研究課題：出生前介入可能な周産期医療人材養成プランー地域連携・女性医師支援を視野にいれてー(研究代表者：与田仁志)」というもので、当時、朝日新聞の「医療の危機ー人材を集め育てる策をー」というタイトルの社説が出たのと時を同じくします。全国的に人材不足が言われていた周産期分野の人材育成に焦点を当てたもので、当時の文部科学省としては画期的な企画でした。これにより、東邦大学新生児学教室がさらに盛り上がるきっかけとなったのです。採択が決まると、早速、学内に「東邦大学周産期人材育成推進室」を設置し、教育研究支援センターの中野弘一先生指導のもと広田幸子氏を初めとした専任のスタッフを置き、多方面の活動ができました。この事業は全国の周産期医療施設に周知され、今では人材育成と言えば東邦大学と言われるまでになりました。

東邦大学周産期センターのもう一つの特色は、他のセンターと比較して多胎の管理に特徴がある点です。というのも中田雅彦産婦人科教授の専門とする双胎間輸血症候群の胎内治療の拠点となっているからです。この専門的治療が可能なのは全国で8か所、都内では成育医療研究センター

と東邦大学の2か所です。「ふたごホットライン」により関東周辺から集まってきます。それが可能なのも、出生後の新生児医療を支えるNICUスタッフのバックアップがあってこそと思っています。研究面でもそれらに特色を持たせた一絨毛膜双胎の長期予後研究 (MonDO Study: Monochorionic twins Developmental Outcome Study) なるものも推進しています。このようにいかなる妊産婦・新生児にも対応できる東邦大学周産期センターですが、これは病院としての総合的な実力がないと成り立ちません。対象とする新生児疾患の種類は、低出生体重児のほか、新生児外科疾患、脳神経外科疾患、心臓外科疾患など幅広い分野にわたります。中でもとりわけ「外科疾患に強い」ことが、大森病院の大きな特色といえ、当院の「小児医療センター」では、新生児期のあらゆる分野の外科手術が可能です。新生児の外科疾患にも対応できる小児外科医や心臓外科医、脳外科医、麻酔科医、眼科医、耳鼻科医、形成外科医、整形外科医などの先生が存在です。また、医師だけでなく看護師、助産師、薬剤師、臨床心理士、理学療法士、医療工学士など多職種のスタッフを巻き込んで病院を盛り上げており、病棟は活気に満ち溢れています。特に臨床心理士は公認心理師と言う国家資格となり、医療分野への参入が今



図2 当教室集合写真（学会開催時）

後増すことを踏まえ、他大学の心理学科との連携をとって教育に協力しており、東邦大学は公認心理師実習のメッカとなりつつあります。周産期医療はまだ新しい分野であり、胎児や新生児の疾患には原因も治療法もわかっていないものがたくさんあります。その意味では、今後もいろいろな発見や開発が可能な「成長株」であり、若い医師には魅力的な領域だと思います。皆様、是非、東邦大学総合周産期母子センターの見学に来て下さい。優しいスタッフがその魅力を厚く語ってくれます。

最後に平成30年11月22-24日に東邦大学新生児学教室が主催した第63回日本新生児成育医学会のポスター（図1）と記念写真をご紹介します（図2）。同時開催として第

28回日本新生児看護学会も東邦大学主催で加茂あゆみ師長を会長として執り行いました。日本新生児成育医学会は日本小児科学会の分科会としては一番歴史が古く、会員数も約3000名と最大規模の分科会です。東邦大学の主催は平成3年の多田裕教授以来27年ぶりでした。会期中に催された、市民公開講座では日本新生児成育医学会が後援している人気医療ドラマ「コウノドリ」の制作秘話と共に、周産期医療に関する課題を家族目線で考えることで、医療者も心揺さぶられるすばらしい内容でした。

（与田仁志）

DOI : 10.14994/tohoigaku.2019-030